

◆【海員随想】BISKRA号航海記(21)③ 新木繁雄

7月14日 インド洋

午前中の機関室チェックで、造水器の給水圧力がバキューム（真空）になっているのを見つけ、4/Eに給水ストレーナーを掃除させた。ストレーナーが詰まり気味だったので、今日の造水量は極端に少ない。アルジェリア・クルーはエンジニアも含め、当直中機関室の見回りということは全然やらない。

今回のようにストレーナーが詰まっても気がつかず、私か武村が見回りで発見するまで、そのままにしてある。たとえ見回りしたところで、給水圧力まで見る者はいないし、バキュームになっているからといって、それがどういう結果をもたらすかということが分かっている者は一人もいない。

3号発電機のLOクーラーが冷えず、LOの出口温度が高い。機関長が3/Eに掃除を命じたらしい。海水側を掃除するよういったはずなのに、LO側をばらしてしまい、LOが全部汚水だまりに流失してしまった。彼は半泣きの状態で、私に「何とかしてくれ」といつてきたが断った。今までに何回彼の尻拭いをしてやったか。もう絶対にしてやらない。自分でやったことは、自分で責任をとれ。

私がことあるごとに「3/Eには重要な仕事をやらせては駄目だ」といつていたのを、機関長もこれで再確認しただろう。

7月15日 インド洋

今日もものすごい時化だ。舳にぶち当たった大波が、マストが見えなくなるほど高く上がり、100メートルも離れている私の部屋のポールドに激しく叩きつけてくる。ワイヤーをターンバックルで締め上げてあるデッキ積みの積荷が崩れないか、気が気ではない。荷崩れを起こせば、こんな船などひとたまりもなく海底の藻屑だろう。デッキに張ったワイヤーにつかまりながら、C/Oが朝夕点検しているからめったなことはないと思うが。

船首方向から来る波だけだから、ピッチングはあるがローリングはないので割合体が楽だ。夏のインド洋はこれが普通なのだ。アデン沖まであと1週間。この時化は続くだろう。

ボーイが石けん5個とタオル2枚、それにバスタオル1枚持ってきた。これらは乗組員に船から支給されるもので、毎航出るらしい。しかし、先航は持ってこなかった。ようやく私も乗組員の一人になったということか。

日曜日は正午計算と各部の温度チェック以外、われわれは休みだが、武村は火災警報のセンサーを掃除していた。船体動揺が激しいので、船長室でのミーティングはなし。

「海員だより」